

公益財団法人国土地理協会 第 23 回（2023 年度）学術研究助成

関東地方北西部における災害碑データベースの構築と
歴史災害が地域社会に与えた影響評価

研究成果報告書

青山 雅史（群馬大学共同教育学部）

I. はじめに

日本列島およびその周辺は、地震や火山活動が活発な変動帯に位置しているため、強震動、液状化、津波や火山噴火などによる災害がこれまで多発している。また、日本列島は梅雨前線や台風などの影響を受けやすく降水量の多い湿潤地域にあることに加え、起伏の大きい山地が広く分布するため、洪水や土砂災害などが頻発している。このように、日本列島は多様な種別の自然災害が発生しやすい地域に位置するため、それらによる被害を繰り返し受けてきた。そのため、災害による犠牲者の供養や被災教訓の伝承が、さまざまな手段・方法によってなされてきた。過去に発生した自然災害は、地形や堆積物などにその痕跡が記録される場合がある。そのほかにも、古文書や行政文書などによる記録、口伝えによる伝承などがある。さらに、災害による犠牲者の供養や被災状況、被災教訓などを石に刻んだ石造物（石碑）がある。石は火・水・虫害に強く、耐久性が高いため、情報を石に刻んだ石碑が多くの地域において建立されてきた（関根 2020）。本稿では、自然災害と関連して建立された石造物や災害に関わる記述のみられる石碑を災害碑と呼称する。

自然災害は同じような地域で繰り返し発生しやすいため、地域社会における自然災害による被害を低減し、今後の地域防災を検討していくうえで、地域に残された過去の災害の実態を明らかにするとともに、その被災状況や教訓などが刻まれた災害碑の情報を把握しておくことは重要である。たとえば、岩手県宮古市姉吉地区には、「高き住居は児孫の和楽、想へ惨禍の大津浪、此処より下に家を建てるな」との碑文が刻まれた石碑が建立されている。この石碑は、1896（明治 29）年明治三陸地震津波と 1933（昭和 8）年昭和三陸地震津波といった 2 回の津波により、当時海岸部にあった集落が壊滅的な被害が生じたことを受けて建立された。その後、集落はこの石碑よりも標高が高い「高台」に移転し、2011 年東北地方太平洋沖地震における巨大津波はこの石碑を超えて遡上することはなかったため、この集落は津波被害を免れた。この事例は、災害碑の地域防災における有効性を示すものとしてよく知られている（たとえば、畑村 2011）。このような災害碑は、過去の地震やそれに伴う津波によって繰り返し甚大な被害を被ってきた三陸地方沿岸部（卯花 1991；北原 2001；首藤 2001）、関東地方南部（羽鳥 1975, 1976；武村 2012）、西日本太平洋沿岸部（羽鳥 1978a, 1978b）や、1783 年天明浅間山噴火に伴い発生した岩屑なだれ（鎌原岩屑なだれ）や火山泥流（天明泥流）、降灰によって甚大な被害が生じた吾妻川、利根川流域（内閣府防災会議 2006, 関 2018）など、日本列島の諸地域において多数存在していることが判明している。

このように、過去に発生した自然災害に関するさまざまな災害碑が日本列島の諸地域において建立されてきたが、それらに関する理解が十分なされ、地域防災に活かされているとは言いがたいようである。前述のように、三陸沿岸部には過去の津波被災教訓が刻まれた災害碑が多数存在し、地震津波防災における有効性が示された事例がみられた一方、多くの地域においては適切な防災行動に結びついたとは言いがたい状況がみられ、甚大な被害が生じた。2018 年 7 月西日本豪雨における土砂災害により甚大な被害を受けた広島県の被災地域では、明治期にも同様の災害が発生して災害碑が建立されていたが、地域住民にはその災害碑に刻まれていた被災教訓が十分には伝わっていなかった事例がみられた（国土地理院 2019）。近年頻発する自然災害をめぐるこれらのような動向を受け、国土地理院は 2019 年

に新しい地図記号「自然災害伝承碑」を制定し、各地域に残る災害碑を地図記号として掲載して、災害時の適切な防災行動につなげることで災害による被害低減を目指す取り組みを始めた。しかし、この新たに制定された地図記号「自然災害伝承碑」は、基本的に自治体が国土地理院に対して地形図への掲載を希望して申請したものが地図記号として掲載されるシステムとなっているため、地図記号「自然災害伝承碑」に該当するものが存在しても、自治体が国土地理院への申請を行わなければ地図記号として地形図に掲載されないこととなる。

群馬県において、地形図（地理院地図）に地図記号として掲載されている「自然災害伝承碑」は、2025年3月時点で15市町村に51基存在する。しかし、それら以外にも、群馬県内には過去の災害に関連した災害碑は数多く存在しているため、現時点（2025年3月）における群馬県内の地図記号としての「自然災害伝承碑」の情報は不十分である。群馬県では、1947年カスリーン台風、1948年アイオン台風や1949年キティ台風などによる豪雨災害以降、死者・行方不明者10名以上となる自然災害は、1959年伊勢湾台風（死者10名）と1966年台風26号（死者15名）による2例のみである（日本気象協会前橋支部 1982, 群馬県防災会議 2024）。そのため、「群馬県は自然災害が少ない」といった思い込みが存在するとの指摘がなされている（たとえば、「ぐんまの自然と災害」編集委員会 2018）。しかし、数十年～数百年の時間スケールで群馬県で発生した歴史災害をみると、前述の1947年カスリーン台風水害や1783年天明浅間山噴火による火山災害のほかにも、1910年水害、1935年水害など、死者・行方不明者100名以上の大規模災害がしばしば発生している。自然災害は大規模なものほど発生頻度は低くなる傾向があるため、過去の災害を理解するためには最近数年間の災害発生状況にとどまらず、数十年以上の長い時間スケールでの検討が必要である。

このような状況を踏まえ、本研究では関東平野北西部の群馬県南部とその県境部の埼玉県と栃木県の一部地域を対象として、災害碑の位置情報、建立年代、建立者や、災害碑に刻まれた碑文から読み取れる被災状況や犠牲者への供養、被災教訓などに関する調査を行った。また、それらの災害碑に刻まれた碑文や資料から読み取れる歴史災害の地域社会への影響についても検討した。災害碑やそれに刻まれた歴史災害が地域社会にどのような影響を与えたかを明示することにより、過去に起こった災害を通して地域における防災・減災を考えるきっかけとなり、地域の防災力の向上の一助となることが期待される。また、本研究の成果は、学校現場での防災教育や地理教育の資料としても活用可能であり、防災教育、地理教育の充実化にも資するものと思われる。なお、本研究の成果を取りまとめた論文（青山 2025）については、群馬大学リポジトリ (<https://gunma-u.repo.nii.ac.jp/records/2000620>) において既に公開されている。本稿は、青山（2025）を加筆・修正して本研究の成果を報告するものである。

Ⅱ．調査地域と調査方法

本研究の調査対象地域は、群馬県南部（安中市、伊勢崎市、上野村、神流町、甘楽町、下仁田町、榛東村、高崎市、玉村町、富岡市、南牧村、藤岡市、前橋市、吉岡町と渋川市の一部地域）と、その県境部付近の埼玉県熊谷市、神川町、上里町と栃木県足利市、佐野市とし

た。本研究では、文献調査と現地調査により、災害碑に関する情報収集および調査を行った。また、本研究代表者が所属する群馬大学の学生に災害碑に関する情報提供の呼びかけを行い、災害碑に関する情報の収集に努めた。

文献調査ではまず、調査地域の自治体が発行した市町村史において、自然災害と関連した石造物についての記述の有無を調べた。さらに、行政機関や各種団体などが発行した自然災害に関連した報告書等出版物、ウェブ上で情報発信されている過去の自然災害や災害碑の記述、その他出版されている写真集等におけるそれらに関する記述についての確認も行った。それらの文献やウェブ情報などから、災害碑の建立地点の位置、碑文の記述内容、建立者、建立年や建立意図などの情報を収集した。現地調査では、災害碑の建立地点の位置、碑文の記述内容、建立者、建立年や建立意図などの情報などを記録した。現地調査では文献やウェブにおいて確認された情報のみならず、河川沿いの地域や寺社などを中心として踏査し、災害碑の分布に関する調査を実施した。また、一部地域においては地元住民への聞き取り調査も行った。それらの方法により、災害碑やその地域で過去に発生した災害に関する情報の収集に努めた。

災害碑は、その石材の風化などの影響によって碑文の読み取りが困難な場合がある。そのため、一部の災害碑の現地調査における情報収集の際には、デジタルカメラによる画像取得のほかに、「ひかり拓本」を用いた災害碑の碑文の画像取得も行った。「ひかり拓本」は、石に刻まれた文字や文様に対し様々な角度で光を照射・撮影してできた影から画像を合成する技術（上相 2023）であり、スマートフォンを用いたアプリが奈良文化財研究所のウェブサイト上で公開・配信されている。

Ⅲ. 関東平野北西部（群馬県南部とその周辺地域）における災害碑の概要

調査地域における災害碑の分布を図 1 に示す。また、それらの災害碑に関する位置、碑名、関連する災害、建立年、建立者などの情報を表 1 に示す。本調査地域においては、計 149 基の災害碑が存在することを確認した。

それらを災害種別にみると、洪水と関連したものが 63 基と最も多く存在する。それに次いで土砂災害（斜面崩壊、土石流、地すべりなどを合わせたもの）に関連したものが 43 基存在する。それらは、1910（明治 43）年 8 月水害、1935（昭和 10）年 9 月水害、1947（昭和 22）年 9 月カスリーン台風水害のいずれかに関連したものが多数を占める。1935 年 9 月水害に関連した災害碑として、局地的な暴風（突風）の発生により生じた被害（風害）に関する碑がみどり市に 2 基存在する。

火山活動による災害と関連したものとして、1783（天明 3）年天明浅間山噴火に関するものが 15 基存在する。そのうち 12 基は、天明浅間山噴火時に発生した大規模火山泥流（天明泥流）に関連したものである。また、天明浅間山噴火時における降灰の厚さやその後の凶作による物価高騰、飢饉などの記述がみられる碑が 3 基存在する。なお、天明浅間山噴火に関連する災害碑は、本調査地域よりも北西部上流側の吾妻川流域において多数存在することが確認されている（内閣府防災会議 2006, 関 2018, 梅村・山本 2024）。地震と関連した災害碑は、埼玉県北部の関東平野北西縁断層帯を震源とするとみられている 1931 年西埼玉地震（萩原ほか 1986）に関する災害碑が、群馬県南西部の安中市において 1 基のみ確認

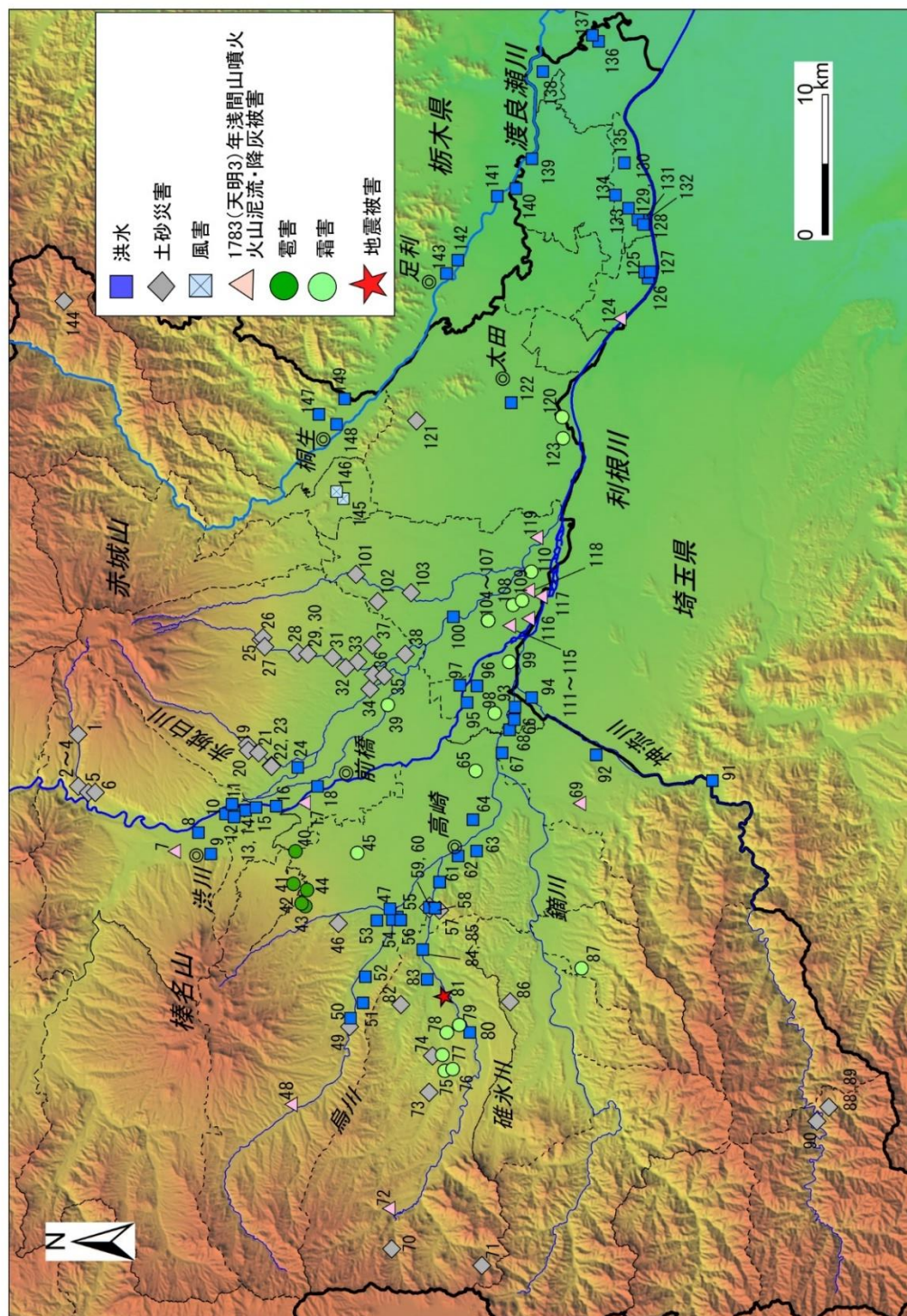


図 1 関東平野北西部（群馬県南部とその周辺地域）における災害碑の分布

図中の数字は、表 1 の災害碑の番号を示す。青山（2025）を加筆・修正し、地理院タイルを用いて作成。

表 1 関東平野北西部（群馬県南部とその周辺地域）における災害碑の諸情報

番号	流域河川	所在地	碑名	関連する災害	災害種	建立年 (西暦、和暦)	建立者
1	沼尾川	渋川市赤城町深山	カスリーン台風災害五十年 祈念碑	1947年カスリーン台風	土砂災害(土石流)	1997年 平成9年9月吉日	建設省、群馬県、赤城村
2	沼尾川	渋川市赤城町長井小 川田	慰霊碑	1947年カスリーン台風	土砂災害(土石流)	1979年 昭和54年9月15日	赤城村、遺族
3	沼尾川	渋川市赤城町長井小 川田	地藏像	1947年カスリーン台風	土砂災害(土石流)	1979年 昭和54年9月15日	赤城村、遺族
4	沼尾川	渋川市赤城町長井小 川田	水難者精霊之碑	1935年水害 1947年カスリーン台風 1948年アイオン台風 1949年キティ台風	土砂災害(土石流)	1979年 昭和54年9月15日	赤城村、遺族
5	沼尾川	渋川市赤城町津久田	殉難之碑	1947年カスリーン台風	土砂災害(土石流)	1958年 昭和33年3月春彼岸	敷島村青年学校教職員、指導 員、生徒、有志
6	見摩入川	渋川市赤城町津久田	見摩入川災害復旧記念碑	1947年カスリーン台風	土砂災害(土石流)	1951年 昭和26年10月1日	
7	利根川	渋川市並木町	流死萬霊墓	1783年天明浅間山噴火・ 泥流	火山泥流	1783年 天明3年	
8	利根川	渋川市中村	復善記念碑	1947年カスリーン台風	洪水	1950年 昭和25年1月	中村耕地整理組合
9	利根川	渋川市行幸田	復善記念碑	1947年カスリーン台風	土砂災害(土石流)	1950年 昭和25年10月	豊秋村
10	利根川	渋川市半田	水害復善記念	1947年カスリーン台風	洪水	1950年 昭和25年3月31日	
11	利根川	渋川市北橋町下箱田	竣工記念	1935年水害	洪水	1936年 昭和11年6月14日	廣瀬桃木両堰普通水利組合
12	利根川	吉岡町漆原	災害復旧之碑	1935年水害	洪水	1940年 昭和15年2月下旬	漆原田用水組合
13	利根川	吉岡町漆原	水害復旧記念	1947年カスリーン台風 1948年アイオン台風	洪水	1952年 昭和27年3月	漆原耕地整理組合
14	利根川	吉岡町漆原	記念碑(災害復旧記念碑)	1947年カスリーン台風 1948年アイオン台風 1949年キティ台風	洪水	1954年 昭和29年9月吉日	群馬県
15	利根川	吉岡町漆原	洪水除け観音(水観音)	1947年カスリーン台風	洪水	1950年 昭和25年4月23日	前橋刑務所
16	利根川	前橋市川原町	工事竣工記念	1947年カスリーン台風	洪水	1950年 昭和25年5月5日	川原護岸工事早期完成期成 同盟会
17	利根川	前橋市総社町	奉書写大仏頂万行首楞嚴 神呪供養塔	1783年天明浅間山噴火・ 泥流	火山泥流	1784年 天明4年	
18	利根川	前橋市岩神町	大渡橋護水尊	1947年カスリーン台風	洪水	1950年 昭和25年8月20日	(建設者名として9名の個人名 と1社の会社名)
19	赤城白川	前橋市富士見町小沢	災害復旧記念	1947年カスリーン台風	土砂災害(土石流)	1951年 副碑に「(昭和)26年4 月復旧」とある。	
20	赤城白川	前橋市富士見町小沢	水難者 供養碑	1947年カスリーン台風	土砂災害(土石流)	1947年 昭和22年9月15日	小沢地区住民一同
21	赤城白川	前橋市富士見町小沢	カスリン台風災害五十年 慰霊の碑	1947年カスリーン台風	土砂災害(土石流)	1998年 平成10年春彼岸	
22	赤城白川	前橋市富士見町原之 郷	水害罹災者供養塔	1947年カスリーン台風	土砂災害(土石流)	1947年 昭和22年9月15日	原東地区住民一同
23	赤城白川	前橋市富士見町原之 郷	災害復旧記念碑	1947年カスリーン台風	土砂災害(土石流)	1960年 昭和35年4月16日	赤城白川耕地整理組合
24	桃ノ木川	前橋市青柳町	天神用水改修記念碑	1947年カスリーン台風	洪水	1949年 昭和24年3月	
25	荒砥川	前橋市鼻毛石町	命木之碑	1947年カスリーン台風	土砂災害(土石流)	1988年 昭和63年3月	
26	荒砥川	前橋市鼻毛石町	慰霊碑	1947年カスリーン台風	土砂災害(土石流)	1977年 昭和52年9月15日	鼻毛石区民一同
27	荒砥川	前橋市鼻毛石町	白欠堰復旧記念碑	1947年カスリーン台風	土砂災害(土石流)	1951年 昭和26年5月	(工事委員として24名の氏名)
28	荒砥川	前橋市河原浜町	水害記念	1947年カスリーン台風	土砂災害(土石流)	1957年 昭和32年9月15日	
29	荒砥川	前橋市大胡町	昭和水難者供養塔(宮閑観 世音、昭和水難観音)	1947年カスリーン台風	土砂災害(土石流)	1949年 昭和24年9月15日	昭和水難者慰霊会
30	荒砥川	前橋市大胡町	昭和水難慰霊碑	1947年カスリーン台風	土砂災害(土石流)	1959年 昭和34年9月15日	昭和水難者慰霊会
31	荒砥川	前橋市泉沢町	水害復旧記念碑	1947年カスリーン台風	土砂災害(土石流)	1955年 昭和30年12月5日	荒砥川耕地整理組合
32	荒砥川	前橋市富田町	水害復旧耕地整理記念碑	1947年カスリーン台風	土砂災害(土石流)	1954年 昭和29年12月19日	富田区民一同
33	荒砥川	前橋市荒口町	水害復興記念	1947年カスリーン台風	土砂災害(土石流)	1951年 昭和26年5月上旬	荒砥川耕地整理組合
34	寺澤川	前橋市女屋町	寺澤川改修記念	1947年カスリーン台風 1948年アイオン台風	土砂災害(土石流)	1953年 昭和28年1月30日	寺沢川改修委員会
35	貴船川	前橋市筑井町	災害復旧	1947年カスリーン台風 1948年アイオン台風	土砂災害(土石流)	1952年 昭和27年3月	木瀬村誌(木瀬村誌編集委員 会 1995)に河川改修工事関係 者により建立されたとの記述。

36	荒砥川	前橋市今井町	水害復旧耕地整理記念碑	1947年カスリーン台風	土砂災害(土石流)	1955年 昭和30年4月	
37	荒砥川	前橋市二之宮町	土橋用水災害復旧記念碑	1947年カスリーン台風	土砂災害(土石流)	1967年 昭和42年12月	
38	荒砥川	前橋市下増田町	荒砥川改修記念	1947年カスリーン台風 1948年アイオン台風	土砂災害(土石流)	1956年 昭和31年5月13日	荒砥川改修促進委員会
39	広瀬川	前橋市下大島町	蚕霊塔	1935年霜害	霜害	1937年 昭和12年5月7日	下大島養蚕実行組合
40	八幡川	榛東村新井	蚕影山	1887年雹害	雹害		
41	染谷川	榛東村広馬場	蠶影大神	1887年雹害	雹害	1888年 明治21年3月25日	八之海道中
42	井野川	榛東村広馬場	蠶影山大神	1887年雹害	雹害	1888年 明治21年4月8日	上宿中
43	井野川	高崎市箕郷町矢原	蠶影山	1887年雹害	雹害	1888年 明治21年5月	當村有志者
44	井野川	高崎市箕郷町柏木沢	蠶影碑	1887年雹害	雹害	1897年 明治30年5月	
45	井野川	高崎市三ツ寺町	蠶霊神之碑	1890年霜害	霜害	1893年 明治26年4月26日	
46	榛名白川	高崎市箕郷町富岡	殉難之碑	1947年カスリーン台風	土砂災害(斜面崩壊)	1953年 昭和28年3月22日	群馬中部土地改良区
47	榛名白川	高崎市沖町	榛名白川改修記念	1910年水害 1948年アイオン台風	洪水	1970年 昭和45年7月	沖町榛名白川改修対策委員
48	烏川	高崎市倉渕町三ノ倉		1783年天明浅間山噴火・泥流	降灰・飢饉		
49	烏川	高崎市中室田町	供養塔	1935年水害	土砂災害(斜面崩壊)	1947年 昭和22年9月26日	第38世徳孝代
50	烏川	高崎市中室田町	昭和十年大風水害決死者供養塔	1935年水害	洪水	1936年 昭和11年春	斎藤省三
51	烏川	高崎市上里見町	(薬師如来像)	1742年水害	洪水	1742年 寛保2年	
52	烏川	高崎市中里見町	不明	1910年水害	洪水	1920年 大正9年10月13日	
53	烏川	高崎市本郷町	小堀川耕地整理災害復舊之碑	1947年カスリーン台風	洪水	1955年 昭和30年5月	嶋上耕地整理組合
54	烏川	高崎市本郷町	昭和十年九月廿五日水害復舊工事竣工記念	1935年水害	洪水		長野堰普通水利組合
55	烏川	高崎市町屋町	町屋井堰之碑	1947年カスリーン台風	洪水	1954年 昭和29年10月20日	
56	烏川	高崎市町屋町	災害復舊記念	1935年水害	洪水	1942年 昭和17年4月	(村長や施工委員など工事関係者26名の氏名)
57	碓氷川	高崎市鼻高町	風水害遭難者之碑	1947年カスリーン台風	土砂災害(土石流)	1959年 昭和34年9月15日	遺族一同
58	碓氷川	高崎市鼻高町	耕墾整理記念	1910年水害	洪水	1917年 大正6年10月	
59	碓氷川	高崎市藤塚町	洪水記念之碑	1910年水害	洪水	1918年 大正7年4月	大字藤塚
60	碓氷川	高崎市藤塚町	射水神	1920年地すべりと河道閉塞による氾濫	土砂災害(地すべり)	1922年 大正11年12月	寄附者 瀧澤喜市
61	碓氷川	高崎市乗附町	田村隧道	1941年水害	洪水	1946年 昭和21年5月	
62	烏川	高崎市片岡町	七士殉職供養塔	1935年水害	洪水	1935年 昭和10年11月26日	高崎市民一同
63	烏川	高崎市石原町	雁行川改修記念碑	1947年カスリーン台風	洪水	1950年 昭和25年5月	工事請負人 川崎信一
64	烏川	高崎市倉賀野町	災害復旧記念碑	1947年カスリーン台風	洪水	1947年 昭和22年12月	
65	烏川	高崎市栗崎町	馬鳴大菩薩	1916年霜害	霜害		栗崎村一同
66	烏川	高崎市新町	記念碑	1910年水害	洪水	1921年 大正10年3月13日	
67	烏川	藤岡市中島		1910年水害	洪水	1910年 明治43年11月	
68	烏川	藤岡市立石新田	大洪水溺死者聖霊供養塔	1910年水害	洪水	1926年 大正15年3月	
69	鮎川	藤岡市緑埜	千部供養塔	1783年天明浅間山噴火・泥流	降灰	1792年 寛政4年	
70	碓氷川	安中市松井田町坂本	熊の平殉難碑	1950年水害	土砂災害(斜面崩壊)	1951年 昭和26年6月9日	
71	碓氷川	安中市松井田町西野牧	遭難碑	1910年水害	土砂災害(土石流)	1922年 大正11年盛夏	村一同
72	碓氷川	安中市松井田町坂本	水押砂除供養塔	1783年天明浅間山噴火・泥流	降灰	1822年 文政5年4月大吉日	坂本中(5名の氏名)
73	九十九川	安中市松井田町下増田	大堰復興記念碑	1935年水害	土砂災害(斜面崩壊)・洪水	1937年 昭和12年秋10月吉辰	(施工委員長、施工委員6名、委員7名の氏名)
74	九十九川	安中市市中後閑	水害之記	1935年水害	土砂災害(斜面崩壊、土石流?)・洪水	1977年 昭和52年9月16日	

75	九十九川	安中市松井田町小日向	蚕影大神	1893年霜害	霜害	1894年 明治27年4月	(17名の氏名)
76	九十九川	安中市松井田町小日向	蚕影大神	1893年霜害	霜害	1894年 明治27年4月	
77	九十九川	安中市松井田町小日向	絹笠大明神	1893年霜害	霜害	1893年 明治26年12月吉辰	(9名の氏名)
78	碓氷川	安中市原市		1893年霜害	霜害	1894年 明治27年4月3日	八本木一同
79	碓氷川	安中市原市	霜災惣毬之碑	1893年霜害	霜害		
80	碓氷川	安中市築瀬	築瀬堰落成記念碑	1949年キティ台風	洪水	1968年 昭和43年	
81	碓氷川	安中市安中	改築記念碑	1931年西埼玉地震	地震	1934年 昭和9年7月23日	
82	碓氷川	安中市下秋間	墓地移轉之記	1910年水害	土砂災害(斜面崩壊)・洪水	1917年 大正6年11月	岡田富八
83	碓氷川	安中市安中	城下水路復旧記念	1935年水害	洪水	1940年 昭和15年9月	
84	碓氷川	安中市板鼻	水害復旧記念碑	1935年水害	洪水	1938年 昭和13年6月	板鼻堰普通水利組合
85	碓氷川	安中市板鼻	板鼻堰災害復旧記念碑	1935年水害 1947年カスリーン台風 1948年アイオン台風 1949年キティ台風	洪水	1952年 昭和27年10月	
86	鎗川	富岡市上黒岩	大災遭難者供養塔	1935年水害	土砂災害(斜面崩壊)	1936年 昭和11年9月26日	
87	鎗川	甘楽町善慶寺	絹笠神社	1893年霜害	霜害	1894年 明治27年5月某日	
88	神流川	上野村新羽	普濟	1907年水害	土砂災害(土石流)		
89	神流川	上野村新羽	懷絶	1907年水害	土砂災害(土石流)	1907年 明治40年12月	
90	神流川	上野村新羽	(地藏尊)	1938年水害	土砂災害(斜面崩壊)		
91	神流川	埼玉県神川町下阿久原	紀功碑	1910年水害	洪水	1925年 大正14年4月1日	
92	神流川	藤岡市本郷	神流川築堤記念	1910年水害	洪水	1920年 大正9年5月	
93	神流川	高崎市新町	沿革之碑	1846年水害	洪水	1935年 昭和10年10月	河岸町
94	神流川	埼玉県上里町勅使河原	矢田堤塘之碑	1846年水害	洪水	1961年 昭和36年3月31日	
95	利根川	玉村町福島	水害復旧碑	1947年カスリーン台風	洪水	1964年 昭和39年5月	災害復旧福島耕地整理組合
96	利根川	玉村町南玉	住吉堰改修碑	1935年水害	洪水	1936年 昭和11年4月	(工事代表者、区長、工事委員、下之宮第一耕地整理組合長、下之宮第二耕地整理組合長らの氏名)
97	利根川	玉村町桶腰	築堤記念碑	1947年カスリーン台風	洪水	1950年 昭和25年10月吉日	(上陽村長、助役、築堤委員長、委員、区民など多数の氏名)
98	烏川	玉村町上之手	上之手邨霜害記念碑	1916年霜害	霜害	1916年 大正5年10月	(寄付者53名、蚕種製造業者6名、発起人5名、世話人8名の氏名)
99	烏川	玉村町南玉	養蚕神	1863年霜害	霜害	1865年 元治2年	(「セハ人」として5名の氏名)
100	広瀬川	伊勢崎市若葉町	昭和二十二年九月十五日大水害 水難者供養塔	1947年カスリーン台風	洪水	1953年 昭和28年8月15日	伊勢崎市
101	粕川	伊勢崎市赤堀今井町	(判読不能)	1947年カスリーン台風	土砂災害(土石流)	1950年 昭和25年12月	
102	粕川	伊勢崎市下舩町	災害復旧耕地整理桂川改修記念碑	1947年カスリーン台風	土砂災害(土石流)	1962年 昭和37年如月	災害復旧耕地整理組合
103	粕川	伊勢崎市本関町	水害復旧記念碑	1947年カスリーン台風	土砂災害(土石流)	1952年 昭和27年1月吉日	川原田耕地整理組合
104	利根川	伊勢崎市山王町	蠶影神社	1893年霜害	霜害	1893年 明治26年5月6日	(30名の氏名と「発起人」として9名の氏名)
105	利根川	伊勢崎市山王町	蠶影大神	1897年雹害	雹害	1900年 明治33年4月	山王道村(雨?)原組中
106	利根川	伊勢崎市山王町	蠶影大神	1897年雹害	雹害	1898年 明治31年4月	名和村大字山王道村東組中
107	利根川	伊勢崎市山王町	蠶影大神	1897年雹害	雹害	1899年 明治32年5月25日	元宿組中
108	利根川	伊勢崎市大正寺町	豊受姫命	1893年霜害	霜害	1903年 明治36年8月	本郷中
109	利根川	伊勢崎市富塚町	蠶霊神	1893年霜害	霜害		十八世 戒應慧定建之 外村中
110	利根川	伊勢崎市下蓮町	蠶景山大神	1893年霜害	霜害	1894年 明治27年4月3日	総郷中 発起(17名氏名)
111	利根川	伊勢崎市戸谷塚町	供養塔	1783年天明浅間山噴火・泥流	火山泥流	1784年 天明4年11月4日	戸谷塚村中
112	利根川	伊勢崎市戸谷塚町	天明地藏尊之碑	1783年天明浅間山噴火・泥流	火山泥流	1962年 昭和37年11月7日	(建設委員氏名あり)

113	利根川	伊勢崎市戸谷塚町	高松宮殿下ご来臨の記	1783年天明浅間山噴火・泥流	火山泥流	1962年 昭和37年11月22日	戸谷塚区民一同
114	利根川	伊勢崎市戸谷塚町	鎌原地蔵	1783年天明浅間山噴火・泥流	火山泥流	1982年 昭和57年11月4日	願主 福田市郎
115	利根川	伊勢崎市戸谷塚町	天明浅間押二百回忌供養塔	1783年天明浅間山噴火・泥流	火山泥流	1982年 昭和57年11月23日	戸谷塚区民一同
116	利根川	伊勢崎市八斗島町	為河流各霊菩提	1783年天明浅間山噴火・泥流	火山泥流	1783年 天明3年7月8日	
117	利根川	伊勢崎市長沼町	為河流各霊菩提也	1783年天明浅間山噴火・泥流	火山泥流	1783年 天明3年7月8日	
118	利根川	伊勢崎市長沼町	為河流各■霊提也	1783年天明浅間山噴火・泥流	火山泥流	1783年 天明3年7月8日	
119	利根川	伊勢崎市境中島	流死靈魂碑	1783年天明浅間山噴火・泥流	火山泥流	1783年 天明3年7月8日	施主 村中
120	利根川	埼玉県熊谷市山王町	壺影山神社	1893年霜害	霜害	1899年 明治32年5月25日	元宿組中
121	利根川	太田市北金井町	災害復旧溜池工事竣工記念之碑	1947年カスリーン台風	土砂災害(土石流)	1950年 昭和25年5月	(設計者1名、施行委員12名、 施行者35名の氏名)
122	利根川	太田市岩瀬川町	復旧記念碑	1947年カスリーン台風	洪水	1949年 昭和24年9月	(「組合員」組合長、常設員、 会計、評議員など職名と35名の 氏名)
123	利根川	太田市堀口町	(石灯籠)	1893年霜害	霜害	1893年 明治26年5月7日	當所 新島語三郎
124	利根川	千代田町舞木	為水死男女菩提也	1783年天明浅間山噴火・泥流	火山泥流	1783年 天明3年7月8日	施主 村中
125	利根川	千代田町上五箇	水害記念碑	1910年水害	洪水	1935年 昭和10年12月20日	(殉難死亡者15名、行方不明 者27名、建設委員等の氏名)
126	利根川	千代田町上五箇	(判読不可)	1910年水害	洪水	1913年 大正2年1月	上五ヶ村 施主 家中惣左衛 門(ほか5名の氏名) 發起人 吉永三郎次
127	利根川	千代田町上五箇	没死萬霊供養塔	1786年水害	洪水	1786年 天明6年7月16日	願主 上五箇村 田嶋半兵衛 今酒巻村 柿沢半兵衛
128	利根川	明和町大輪	(石鳥居)	1823年、1824年水害	洪水	1836年 天保7年9月吉日	願主上三林郎 玄庵更 荒川 金左衛門
129	利根川	明和町須賀	(石灯籠)	1823年、1824年水害	洪水	1836年 天保7年9月良日	願主上三林郎 玄庵更 荒川 金左衛門
130	利根川	明和町須賀	壟田碑	1823年、1824年水害	洪水	1916年 大正5年11月25日	(佐貫村青年会須賀村支部 員、建設委員などの氏名)
131	利根川	明和町須賀	開田碑	1823年、1824年水害	洪水	1928年 昭和3年5月1日	(御大典記念池沼埋立組合名 誉顧問、顧問、測量監督、現 場監督などの氏名)
132	利根川	明和町須賀	(「奈良石」の愛称)	1823年、1824年水害	洪水	1842年 天保13年6月	須賀村宮亀年刻
133	利根川	明和町大佐貫	(石灯籠)	1823年、1824年水害	洪水	1837年 天保8年2月吉辰	願主上三林郎 玄庵更 荒川 金左衛門
134	利根川	明和町南大島	(「三五詠歌碑」の愛称)	1823年、1824年水害	洪水	1833年 天保4年春	
135	利根川	明和町田島	流死為供養塔	1742年水害	洪水	1742年 寛保2年8月2日	上州邑楽郡田嶋村 (施主として6名の氏名)
136	利根川	板倉町海老瀬	復旧記念	1947年カスリーン台風	洪水	1953年 昭和28年3月	(工事関係者多数の氏名)
137	利根川	板倉町海老瀬	決潰口跡	1947年カスリーン台風	洪水	1950年 昭和25年9月15日	(利根川上流工事事務所長 横田周平ほか、工事関係者氏 名)
138	渡良瀬川	板倉町除川	原田彌衛之碑	1890年水害	洪水		
139	渡良瀬川	館林市下早川田町	修堤碑	1910年水害	洪水	1911年 明治44年	
140	渡良瀬川	館林市傍示塚町	水害記念碑	1910年水害	洪水	1911年 明治44年	
141	渡良瀬川	佐野市高橋町	築堤記念碑	1914年水害	洪水	1915年 大正4年8月30日	(土木工事関係者芳名録とし て10名の職名と氏名、工事盡 力者3名の氏名、建碑委員23 名と外大字一同)
142	渡良瀬川	足利市猿田町	水神隄碑	1890年水害	洪水	1911年 明治24年	早川夢平(栃木県土木係など 工事関係者の氏名記載あり)
143	渡良瀬川	足利市岩井町	渡良瀬川とともに	1947年カスリーン台風	洪水	2000年 平成12年3月26日	
144	渡良瀬川	みどり市東町沢入	遭難者菩提之碑	1895年水害	洪水	1937年 昭和12年5月	村井彌市
145	利根川	みどり市笠懸町鹿	感恩之碑	1935年風害	風害	1936年 昭和11年4月25日	第七區
146	利根川	みどり市笠懸町阿左美	風害供養	1935年風害	風害	1936年 昭和11年9月25日	鹿之川
147	渡良瀬川	桐生市市東	水波能賣神	1947年カスリーン台風	洪水	1956年 昭和31年	
148	渡良瀬川	桐生市新宿	水害殉難者供養塔	1947年カスリーン台風	洪水	1948年 昭和23年	
149	渡良瀬川	桐生市菱町	桐生大水難霊供養塔	1947年カスリーン台風	洪水	1979年 昭和54年	

青山(2025)に加筆・修正して作成。判読の困難な文字は■で表した。

されており、近世以降における群馬県に甚大な被害をもたらすような地震発生数の少なさを反映している。

本地域においては、霜害や雹害などに関連した災害碑も多く存在しており、霜害に関する災害碑が 17 基、雹害に関する災害碑が 8 基確認された。それらは、かつて本調査地域において養蚕（蚕糸業）が盛んであったことを反映している。霜害や雹害により、生糸の原材料となる繭を産出する蚕の飼料となる桑の葉が枯死することで蚕の飼育が不可能となり、神社の境内等に穴を掘削して蚕の遺骸を埋葬したことが碑文として刻まれた災害碑が多く存在する（青山 2022）。それらの霜害碑や雹害碑の多くは明治中期から昭和初期にかけて建立されており、この地域において蚕糸業が盛んであった時期と重なり、本調査地域における当時の養蚕、蚕糸業の重要性を示すものといえよう。

IV. 風水害（洪水、土砂災害、風害）に関する災害碑

本調査地域における洪水や土砂災害、暴風に関連する災害碑は、前述のように 1947 年 9 月カスリーン台風水害や 1935 年 9 月水害、1910 年 8 月水害の 3 つの水害に関連したものが多くを占める。また、そのような台風や前線による豪雨によりもたらされた災害の主要因が洪水か土石流かを厳密に区分、判別することが困難である事例も存在する。本章では、豪雨や暴風に起因して発生した洪水や斜面崩壊、土石流、暴風被害などに関連する碑の概要を述べる。そのうちのいくつかの災害碑については、「ひかり拓本」を用いることにより得られた画像を提示するとともに詳述する。なお、各災害碑に記した「災害碑番号」は、図 1 および表 1 において災害碑ごとに付した「番号」に該当する。

1. 1947（昭和 22）年 9 月カスリーン台風水害

調査地域に多数存在する水害碑においては、1947（昭和 22）年 9 月カスリーン台風に関連したものが最も多く、53 基存在している。カスリーン台風は東日本の広範囲に多量の降雨をもたらし、多くの河川流域において洪水や土砂災害などが発生した（中央防災会議災害教訓の継承に関する専門調査会 2010）。カスリーン台風が襲来した 1947 年 9 月 13 日 11 時 20 分から同月 15 日 20 時 40 分にかけての前橋の降水量は 393mm を観測し、群馬県内では特に赤城山及び榛名山周辺と群馬県中央部から南部にかけて降水量が多かったようである（中央防災会議災害教訓の継承に関する専門調査会 2010）。そのため、赤城山から流下する河川流域では斜面崩壊や土石流が多発し、その下流の平野部では多くの地域で洪水被害が発生して、群馬県内では死者 592 名、行方不明者 107 名、床下浸水 39,938 戸、床上浸水 31,019 戸、流失倒壊家屋 1,936 戸といった甚大な被害が生じた（群馬県 1947）。赤城山西麓から南麓にかけての 1947 年 9 月カスリーン台風水害碑については、青山（2020）が報告している。

赤城山西麓の沼尾川では大規模土石流（山津波）が発生して甚大な被害が生じ、沼尾川流域において 5 基の水害碑が建立されている。渋川市赤城町長井小川田には、33 回忌にあたる 1979 年に遺族などによって建立された水害碑が 3 基（災害碑番号 2～4）存在する。このうちの一つである水難者精霊之碑（災害碑番号 4）には、カスリーン台風水害時の沼尾川流域における犠牲者 80 名のほか、1935 年水害の犠牲者 5 名、1948 年アイオン台風による

犠牲者 1 名，1949 年キティ台風による犠牲者 1 名の氏名が刻まれている。赤城山南西麓の前橋市富士見地区では，赤城白川で発生した「山津波」により 104 名の死者があり，富士見町小沢には小沢地区の水難死亡者 39 名の氏名を刻んだ水難者供養碑（災害碑番号 20），富士見町原之郷には原東地区における死者 54 名の氏名を刻んだ水害罹災者供養塔（災害碑番号 22）などが建立されている。また，赤城山南側斜面を流下する荒砥川流域の前橋市大胡地区には，大規模土石流による被災状況や犠牲者 71 名の氏名，被災からの復旧・復興過程などを刻んだ水害碑（災害碑番号 28）や，カスリーン台風水害発生後に設立された昭和水難慰霊會が建立した観音像（災害碑番号 29），大胡地区のみならず荒砥川や粕川流域における犠牲者の氏名を刻んだ水害碑（災害碑番号 30）などが建立されている。

渋川市から前橋市，玉村町にかけての利根川やその支流沿いの低地（広瀬川低地）では，



図 2 吉岡町漆原の洪水除け観音（中），水観音碑記（右）と説明板（左）
2019 年 8 月青山撮影．

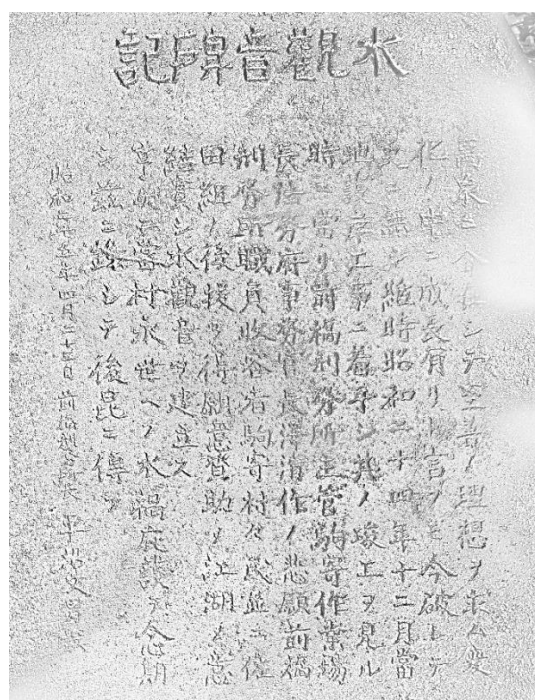


図 3 水観音碑記の碑文の「ひかり拓本」画像（2024 年 12 月青山撮影，画像取得）

洪水被害が多数の地点で発生し、その被害に関する碑が複数存在する。群馬県吉岡町漆原の利根川右岸堤防上（サイクリングロード）には、洪水除け（みずよけ）観音と称される観音像が建立されている。（災害碑番号 15，図 2）その背面には「水観世音 昭和二十五年四月二十三日 前橋刑務所」と記されている。この観音像の建立経緯を記した「水観音碑記」と吉岡町教育委員会が設置した洪水除け（みずよけ）観音の由来を記した説明板が隣接して存在する（図 2）。「水観音碑記」には、1949（昭和 24）年 12 月に護岸工事に着手し、その竣工にあたり観音像を建立し、水禍庇護を念期するとある（図 3）。「水観音碑記」裏面には、観音像建立の発起人や後援者、建立世話人などの氏名が記載されている。吉岡町教育委員会設置の説明板によると、この地区は 1947 年カスリーン台風、48 年のアイオン台風、49 年のキティ台風と 3 年連続して台風が襲来し、洪水氾濫によって田畑や家屋が流された人もあり、用水路（天狗岩用水）の取水堰も修理の度に破壊されたとある。また、復旧工事は、水観音碑記の碑文にも記述がある佐田組が群馬県より依頼を受けて行われ、前橋刑務所の協力を得て着工後 5 ヶ月目の 1950 年 4 月末に完成したと記されている。

カスリーン台風の洪水に関連した水害碑は、利根川右岸の渋川市中村（災害碑番号 8）、半田（災害碑番号 10）、吉岡町漆原（災害碑番号 12～14）や、利根川左岸の前橋市川原町（災害碑番号 16）などにも存在する。前橋市中心市街地付近の利根川に架橋されている大渡橋は本水害で被災し、橋の一部が流失した（前橋市戦災復興誌編集委員会編 1964）。その大渡橋の左岸側の袂（岩神町）には、本水害による大渡橋の被災が記述された水害碑が存在する（図 2，災害碑番号 18）。なお、この大渡橋は、後述する 1935 年 9 月水害時にも、橋梁の一部が流失している（前橋市戦災復興誌編集委員会編 1964）。玉村町福島には、玉村町の利根川右岸堤防 6 地点で破堤が生じ、多くの家屋被害、広域的な浸水が生じた様子や復興過程を記した水害碑が存在する（災害碑番号 95）。伊勢崎市中心部西側を流れる広瀬川では洪水により多くの家屋の流失や浸水被害が発生し、伊勢崎市若葉町の広瀬川右岸堤防状には、伊勢崎市内における死者 40 名の氏名を刻んだ水害碑（災害碑番号 100）が建立されている。

渡良瀬川流域では、堤防決壊や越水が多数の地点で発生して洪水被害が頻発し、死者・行方不明者は桐生市で 146 名、足利市で 319 名と甚大な被害が発生した（中央防災会議災害教訓の継承に関する専門調査会 2010）。桐生市内には 3 基の水害碑が建立されており、新宿三丁目の定善寺境内には、桐生市内のカスリーン台風水害における死者が刻まれた水害碑が存在する（災害碑番号 148）。足利市岩井町の渡良瀬川左岸堤防では破堤が生じ、足利市街地の広域に浸水被害がもたらされた（中央防災会議災害教訓の継承に関する専門調査会 2010）。その破堤地点付近には、本水害による犠牲者の氏名を刻んだ石碑やシンボルタワー、地蔵尊、供養塔などが建立されており（災害碑番号 143）、現在でもこの地において毎年供養が続けられている。板倉町においても渡良瀬川（渡良瀬遊水地）の堤防が決壊して板倉町が広域的に浸水する被害が発生し、堤防決壊地点には被災状況や教訓、治水対策の必要性などを刻んだ水害碑が建立されている（災害碑番号 137）

2. 1935（昭和 10）年 9 月水害

1935（昭和 10）年 9 月下旬に日本列島に襲来した台風 10 号の影響によって豪雨が引き起こされ、群馬県内では 9 月 24 日から翌 25 日にかけて、特に群馬県西部を中心として多

量の降水がもたらされた（群馬県 1937）。その影響により、群馬県南西部の碓氷川、烏川や県西部の吾妻川などの上流域の山間部では土石流や斜面崩壊が多発し、それらの河川下流側の平野部では洪水被害が発生した（群馬県 1937）。群馬県内では、この水害によって死者 218 名、行方不明者 39 名、床下浸水 13,320 戸、床上浸水 4,011 戸、流失家屋 859 戸といった甚大な被害が生じた（日本気象協会前橋支部編 1982）。

調査地域における 1935 年 9 月水害に関連した水害碑は 12 基存在する。それらは、犠牲者の供養のために建立された碑のほか、「用水組合」や「普通水利組合」などにより建立された用水路復旧を記念した碑が目立つ。1935 年水害に関連する碑は、多量の降水があり、斜面崩壊や大規模土石流「山津波」による甚大な被害が生じた烏川や碓氷川支流の九十九川流域の山間部において、多数建立されている。安中市の山間部を流下する九十九川の谷底平野にある下増田には、当地区において多くの人畜の死傷、耕地の流出、山林の崩壊などが生じたことや、当地区における復旧工事について、その作業期間や工費などを詳細に記した水害碑が存在する（災害碑番号 73）。その九十九川支流の後閑川流域の中後閑には、当地区（旧後閑村）で発生した土砂災害の被災過程を詳細に記し、旧後閑村では死者 38 名、重軽傷者 200 余名、家屋倒壊流失等 100 戸に及び、全ての橋梁が流失など、甚大な被害が生じたことを刻んだ水害碑が建立されている（災害碑番号 74）。富岡市北部の鐺川支流山間部にある上黒岩には、当地区の被災状況、崩壊発生箇所数や被災農地面積、当地区における罹災者 8 名の氏名や死因などを刻んだ水害碑が一周忌に建立されている（災害碑番号 86）。

烏川流域にも 1935 年 9 月水害に関する碑が複数存在する。烏川流域において山地と平野の境界部付近に位置する高崎市中室田町には、土砂災害により犠牲となった寺院の住職を供養する水害碑（災害碑番号 49）や、当地区の犠牲者と思われる 9 名の氏名を刻んだ「昭和十年大風水害歿死者供養塔」（災害碑番号 50）などが建立されている。烏川流域の高崎市街地では烏川沿いの低地において大規模な洪水被害が発生し、水害発生時の救護活動中に殉職した旧陸軍 15 連隊の兵士 7 名を碑に刻んだ「七士殉職供養塔」（災害碑番号 62）が、烏川右岸の片岡町に存在する。1935 年水害時に発生した洪水被害に関連した碑は、利根川左岸の渋川市北橘町下箱田（災害碑番号 11）や同右岸の吉岡町漆原（災害碑番号 12）、同左岸の玉村町南玉（災害碑番号 96）など、利根川沿いの平野部にも複数建立されている。

1935 年 9 月水害発生時には、みどり市（旧笠懸村）において竜巻と思われる突風による被害が多発した。この竜巻と思われる突風は 1935 年 9 月水害時に襲来した台風 10 号の影響によるものと考えられており（笠懸村誌編纂室 1987）、旧薮塚本町付近から旧笠懸村鹿付近にかけた帯状の領域に甚大な被害をもたらした（群馬県 1937）。笠懸町鹿には、全壊 50 戸、半壊 25 戸、死者 4 名といった甚大な被害が当地区に生じたことや、皇室からの御下賜金、県からの罹災救助金など、各方面からの援助への感謝などを刻んだ碑（災害碑番号 145）があり、笠懸町阿佐美には、風害の死者 4 名の氏名と「風害供養」の文字が刻まれた地藏菩薩（災害碑番号 146）が存在する。

3. 1910（明治 43）年 8 月水害と 1907（明治 40）年 8 月土砂災害

1910（明治 43）年 8 月上旬に梅雨前線と台風の影響によって多量の降水が広域にもたらされ、関東・甲信越・東北地方の広範囲にわたって甚大な被害が発生した（群馬県 1971）。関東地方では利根川や荒川など多数の河川において破堤が生じ、利根川や荒川流域の低地

が広域にわたり浸水した。群馬県では県南西部の碓氷郡、烏川や鐺川、神流川などの河川下流域や合流点付近に位置する多野郡、利根川の破堤によって広域的な浸水が生じた県南東部の邑楽郡などにおいて、多くの人的被害が発生した（群馬縣議會事務局 1954）。群馬県内におけるこの水害による死者は 284 名、流出・破損・半潰・全潰家屋は 4,934 戸、浸水被害（床上浸水および床下浸水）を受けた家屋は 27,154 戸であった（群馬縣議會事務局 1954）。このような被害状況を反映して、調査地域における 1910 年 8 月水害に関する災害碑は、碓氷川、烏川、鐺川、神流川などの流域や、県南東部の利根川と渡良瀬川沿いの地域に多数建立されている。

碓氷川上流部の長野県との県境付近の案証松井田町西野牧には、暴風雨の襲来により発生した斜面崩壊や土石流によって溺死した 17 名を供養するため、発災から 13 年後に当時の村民により建立された碑が存在する（災害碑番号 71）。安中市下秋間には、暴風雨の襲来により碓氷川支流の秋間川が氾濫し、当地区において多くの家屋被害が生じたこと、山崩れにより 4 名が死亡したことや、農地や山林の被害面積、被災した墓地の移転経緯などが刻まれた水害碑が建立されている（災害碑番号 82）。碓氷川下流側左岸の藤塚町には、暴風雨の襲来により碓氷川が増水して当地区において破堤が生じ、それによって当時の藤塚村において多くの家屋が被災し、死者 2 名、行方不明者 1 名などの被害が生じたことや、被災からの復旧過程、皇室からの御下賜金への感謝などが述べられた洪水記念碑が存在する（災害碑番号 59）。

烏川と鐺川合流地点付近の藤岡市中島から高崎市新町にかけての烏川右岸には、この地域において甚大な洪水被害が発生したことを受けて 3 基の水害碑が建立されている。それらの碑については、宮（2021）が当該地区の 1910 年 8 月水害による被災状況を含めて詳しく述べている。群馬県藤岡市中島地区の宝昌寺境内には、この水害における中島地区の被災状況や当地区における犠牲者の氏名などを記した水害碑（災害碑番号 67）が建立されている（図 4）。この水害碑には碑名は見当たらない。本碑の正面に刻まれた碑文には、明治 43 年 8 月の豪雨によって烏川の水位が上昇し、8 月 10 日には烏川堤防が決壊して中島地区（当時の中島村）全域が浸水したことが記されている。また、この烏川の洪水により、中島地区の民家 65 戸のうち 28 戸が流失したこと、水田や畑などの農地約 40ha（四十余町）が被害を受けて農作物を失ったこと、溺死者が 25 名であったこと、中島地区の住民がこの未曾有の惨状を後世に伝えようと欲して建碑したことなどが刻まれている（図 4）。碑の裏面には、明治 43 年 8 月 10 日の年月日とともに、溺死者 15 名の氏名が刻まれている。

神流川を挟んで藤岡市鬼石地区と埼玉県神川町下阿久原地区とを結ぶ上武橋の右岸（埼玉県）側の袂には、1909（明治 42）年に架橋された上武橋が 1910（明治 43）年の本水害で流失し、1912（大正元）年に架橋されたが、1913（大正 2）年の大洪水で再度流失したこと、その後 1922（大正 11）年に架橋されるに至る経緯などが刻まれた水害碑が存在する（災害碑番号 91）。

群馬県南東部の邑楽郡においても、利根川や渡良瀬川において多くの地点で破堤が生じたことにより広域的な浸水被害がもたらされ、甚大な被害が発生した。千代田町上五箇には、利根川が増水により利根川堤防が決壊し、当時の富永村において死者 14 名、行方不明者 28 名、流失家屋 47 戸、浸水家屋 580 戸といった甚大な被害が生じ、ほとんどの農地が砂礫に埋没して池沼と化したことや、皇室からの御下賜金への感謝、被災後の復旧過程などを記し

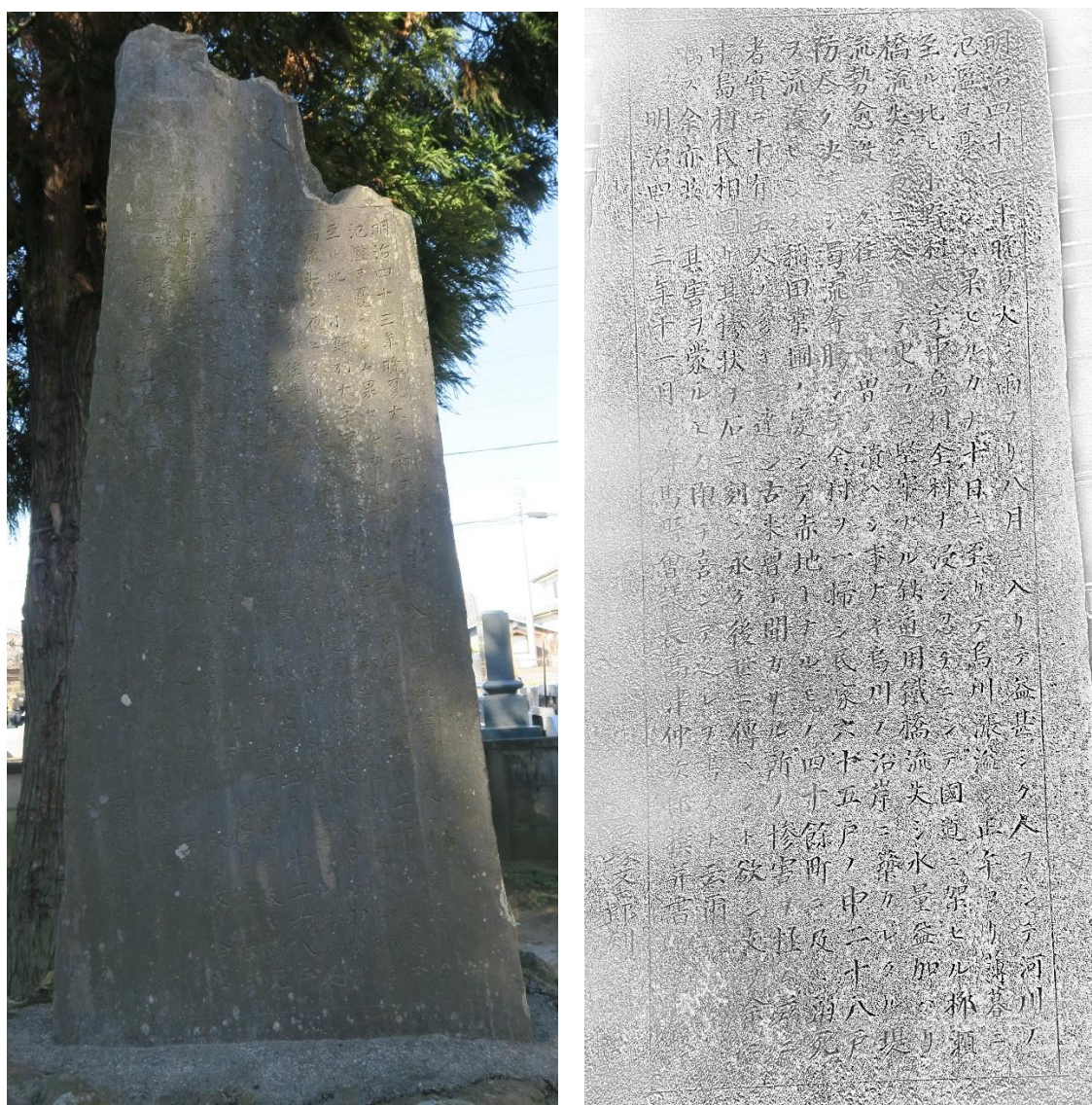


図4 群馬県藤岡市中島の1910(明治43)年8月水害碑(左)と正面碑文の「ひかり拓本」画像(右)

2020年2月青山撮影(ひかり拓本画像は2024年12月画像取得)。

た水害記念碑(災害碑番号125)や、上五箇地区における死者の氏名を刻んだ慰霊碑(災害碑番号126)が存在する。渡良瀬川と矢場川の合流点付近に位置する傍示塚町の矢場川右岸堤防近傍には、本水害により本地区の堤防が約87m(48間)にわたって決壊し、多くの家屋に浸水被害が発生したこと、当地区では死者が出なかったことや復旧過程などが刻まれた「水害記念碑」が建立されている(災害碑番号140)。

神流川上流域の上野村新羽には、1907(明治40)年8月25日に発生した大規模土砂災害(山津波)に関連した碑が2基建立されている。当時の県知事有田義資による「悽絶」との題額(碑名)が正面上部にある碑(災害碑番号89)には、明治40年8月に10日間ほど大雨が降りやまず、各地で山崩れや洪水などによる災害が発生し、8月25日に当地において山崩れが発生して人家8戸37棟が埋没し、死者37名、負傷者6名、後に遺体で発見さ



図5 群馬県上野村新羽の1907（明治40）年8月土砂災害碑（左）と正面碑文の「ひかり拓本」画像（右）

2024年12月青山撮影，画像取得。

れた者 22 名の大惨事となったことが記され，県知事有田義資などが視察に訪れたことや，死者の霊魂を弔い諸氏の義損を伝えるために建碑されたことなどが刻まれている（図 5）。この碑の右側面には，明治 40 年 12 月建之との文字が刻まれている。この碑に隣接して，「普濟（あまねくすくう）」の文字とともに，「瀧之澤山崩 埋没者供養」の記述と，犠牲者 41 名の氏名が刻まれた供養碑（災害碑番号 88）が建立されている。

4. 江戸期の水害

調査地域における江戸期の水害碑は，1742（寛保 2）年水害，1786（天明 6）年水害，1823（文政 6）年および 1824（文政 7）年の水害，1846（弘化 3）年水害に関連したものが存在する。

明和町田島には，1742 年の水害時における流死者供養塔が建立されており，供養塔が建立された地点において約 4.5m（一丈五尺）浸水したことが施主 5 名の氏名とともに刻まれ



図 6 群馬県明和町田島の 1742（寛保 2）年水害碑「流死為供養塔」に刻まれた「出水此塔地一丈五尺」の文字

2021 年 4 月青山撮影。

ている（図 6，災害碑番号 135）。千代田町上五箇には，1786（天明 6）年水害による犠牲者の供養塔が建立されており，当地の堤防が約 265m の区間にわたって破堤した（切所百四十六間）ことが刻まれている（災害碑番号 127）。

明和町には，1823（文政 6）年と 1824（文政 7）年の 2 年連続で発生した水害に関する水害碑が複数存在する。この 2 年連続で発生した水害により，明和町須賀地区には利根川左岸堤防の破堤によって北池，西池と称する 2 つの池沼が形成されたことが，後述の複数の災害碑に刻まれている。北池は 1914（大正 3）年に埋め立てられて水田が造成され，その経緯を刻んだ碑が須賀地区の菅原神社に存在する（災害碑番号 129）。その菅原神社境内には，1824（文政 7）年の水害を受けて当時の上三林村（現在の館林市上三林）の荒川玄庵が（須賀村に）五十両の助成を施したことが石灯籠に刻まれている（災害碑番号 127）。西池は 1928（昭和 3）年に埋め立てられて水田が造成され，そのことを刻んだ碑がかつて存在した西池の近傍地に建立されている（災害碑番号 131）。明和町須賀の利根川左岸堤防上には，1823（文政 6）年と 1824（文政 7）の 2 年連続で発生した洪水被害により村の寺院や多くの家屋が流失し，農地は砂に覆われたことや，現在の熊谷市にあたる武州幡羅郡下奈良村の名主であった吉田市右衛門が被災地に多くの金銭的援助を施し，そのことへの謝意を刻んだ「奈良石」とよばれる碑が存在する（災害碑番号 132）。明和町南大島には，1823（文政 6）年から 1825（文政 8）年にかけて 3 年連続で水害に見舞われ，その被災状況や，被災地の復旧・復興に尽力した人々の活動やそれらの人々への感謝の意などを詠歌十五首とともに刻んだ「三五詠歌碑」とよばれる碑が建立されている（災害碑番号 134）。

烏川と神流川の合流点付近の高崎市新町と埼玉県上里町勅使河原には、1847（弘化 3）年の水害に関する碑が存在する。高崎市新町の烏川右岸にある諏訪神社境内には、神流川と烏川の合流点付近、神流川右岸の埼玉県側にかつて存在していた毘沙吐村に鎮座していた諏訪神社が 1847（弘化 3）年の大洪水により流失し、村全体が壊滅的な被害を受けたこと、その後諏訪神社を含め全村神流川対岸（左岸）の高崎市新町地区（旧河岸町）に移転した経緯などが記された水害碑が存在する（災害碑番号 93）。上里町勅使河原の神流川右岸堤防上には、神流川右岸堤防が決壊して、神流川と烏川合流地点よりも下流側の地域の多数の集落が浸水して甚大な人的・物的被害が生じたことや、その後の堤防補強工事などの当地域における防災対策の進展などが記された碑が存在する（災害碑番号 94）。

V. 火山活動と地震活動に関する災害碑

調査地域周辺には複数の活火山が存在するが、調査地域における火山活動に関する災害碑は、1783（天明 3）年に浅間山で発生した大規模噴火（天明噴火）による火山災害に関連するもののみである。天明浅間山噴火に伴い発生した大規模火山泥流である天明泥流は吾妻川から利根川を流下し、河口まで到達して太平洋に流入したとされ、その一部は利根川から分流して江戸川に流入し、多くの遺体が江戸川沿岸部にも漂着したとされる（内閣府防災会議 2006）。この天明浅間山噴火に伴う鎌原土石なだれで甚大な被害を被った浅間北麓の嬬恋村鎌原地区や、天明泥流が流下した吾妻川や利根川、江戸川沿岸部などには、鎌原土石なだれや天明泥流の犠牲者の供養、それらによる被災状況や被災教訓の後世への伝承など、さまざまな理由で多くの災害碑が建立された（内閣府防災会議 2006、関 2018）。天明噴火に関わる災害碑についてはこれまで多くの調査・研究がなされており、多くの成果が既に得られている（内閣府防災会議 2006、井上 2009、関 2018、梅村・山本 2024）。本研究で示した天明噴火に関わる災害碑は、これらの既存研究において提示されているものである。

本調査地域においては、渋川市から千代田町にかけての利根川沿岸部において、天明泥流に関する災害碑が点在している。それらの多くは、天明泥流によって上流から流されてきた多数の遺体が漂着し、それらの遺体を地元住民が収容して埋葬したことや、泥流による犠牲者の供養などを刻んだものとなっている。伊勢崎市戸谷塚町には、天明泥流災害発災 1 年後（1784（天明 4）年）に建立された「供養塔」の文字が基壇に刻まれた地藏（災害碑番号 111）、その建立経緯や当地区において漂着した多数の遺体を埋葬したこと、被災者への供養などを記して百八十回忌（1962（昭和 37）年）に建立された「天明地藏尊之碑」（災害碑番号 112）、百八十回忌供養と「天明地藏尊之碑」建設除幕の式典に高松宮殿下の臨席を記した「高松宮殿下御来臨の記」（災害碑番号 113）、二百回忌（1982（昭和 57）年）に建立された「鎌原地蔵」（災害碑番号 114）など、天明泥流に関わる 4 基の災害碑が存在する。

そのほかにも、天明噴火による降灰状況や農地・農作物の被災状況、その後の凶作で生じた米価の価格高騰や飢饉の発生などを刻んだ災害碑が、浅間山からの距離が相対的に近く多量の降灰があった群馬県南西部に複数存在する。藤岡市緑埜の千部供養塔（災害碑番号 69）には、供養塔の三面に天明浅間山噴火における火山活動の時系列推移、群馬県とその周辺の 8 地点の火山灰の降灰（堆積）の厚さ、噴火後の凶作と米など農作物の価格高騰などの情報が刻まれている（図 7）。

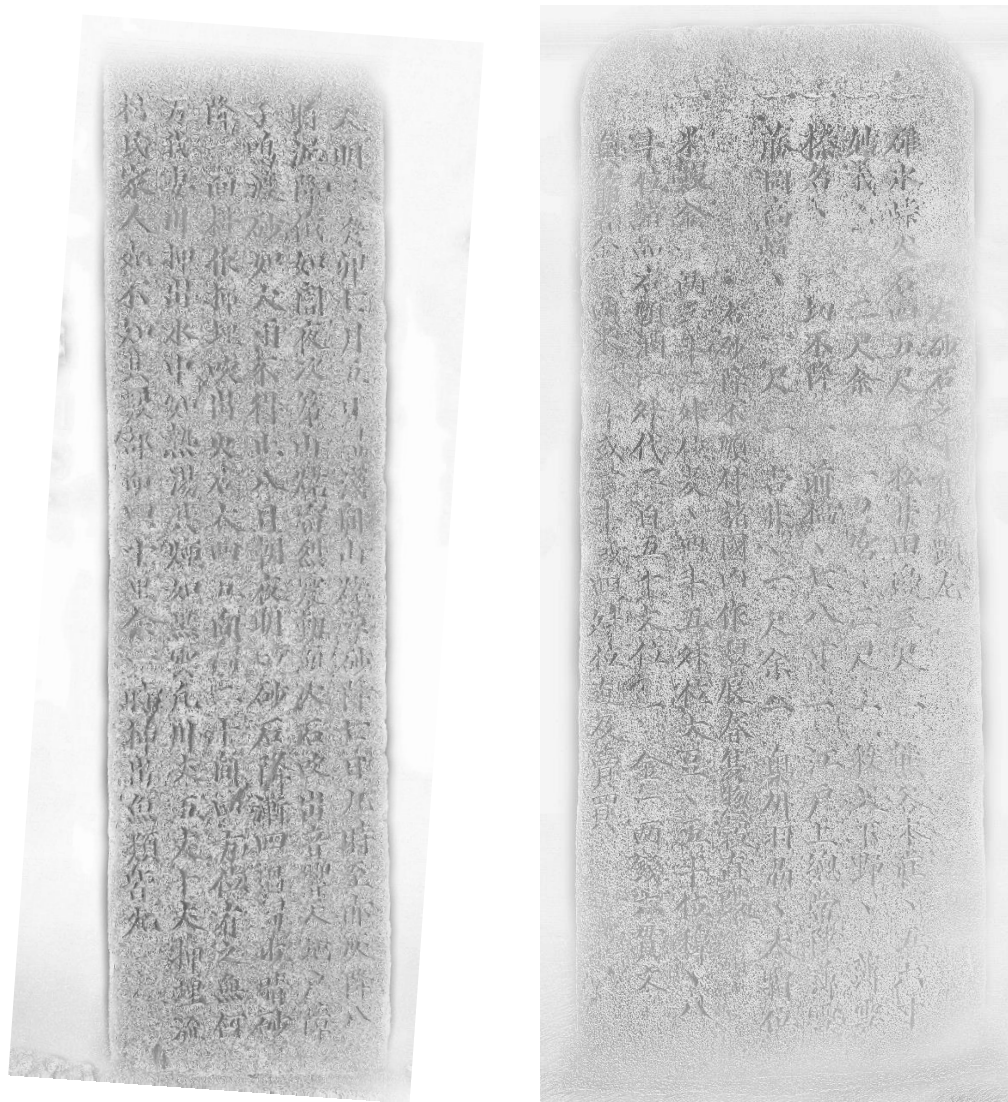


図7 群馬県藤岡市緑埜の1783(天明3)年浅間山噴火災害碑「千部供養塔」左面碑文(左)と背面碑文(右)の「ひかり拓本」画像
(2025年2月青山撮影, 画像取得).

調査地域における地震活動に関わる災害碑は、安中市安中の愛宕神社境内に建立された「改築記念碑」(災害碑番号81)のみであり、関東平野西縁部の活断層が引き起こしたとされる1931(昭和6)年西埼玉地震(萩原ほか 1986)による当神社における被害状況を記したものである。

VI. 霜害、雹害に関する災害碑

調査地域における霜害や雹害に関する災害碑については青山(2022)で詳述しており、ここではその概要について述べる。

江戸中期以降、養蚕業が盛んになるにつれて地域における養蚕業の重要性は増し、地域に

収益をもたらす蚕を神（蚕神）として祀る「養蚕信仰（蚕影信仰、絹笠信仰）」が広まっていった（阪本 2008）。養蚕が盛んであった群馬県においては、豊蚕祈願、蚕の供養などのために養蚕信仰に関連した石碑（蚕神碑）、石造物が多数建立されていった（阪本 2008, 富岡製糸場世界遺産伝道師協会編 2018）。養蚕業は降雹や降霜などによる被害をたびたび受けてきた。桑の葉が降雹、降霜などにより枯死すると生糸の原材料である繭を産出する蚕の飼料が得られなくなり、蚕の飼育が不可能となる。神社の境内等に穴を掘削して蚕の亡骸を埋納し、その場所に塚を造成して蚕を供養するとともに、雹霜害の「戒め」として後世に伝えるため、霜害碑や雹害碑が建立された。養蚕に関連した石碑の建立理由は上述のようにさまざまであるが、地域における養蚕の重要性（依存度）が高まった幕末から明治期に、養蚕が盛んに行われていた地域において多くの養蚕関連碑が建立された。また、「蚕影大神」など碑名のみがあり、碑文のない石碑については建立理由が判然としないものもある。

調査地域において、霜害や雹害に関する碑文が刻まれた碑で最も古いものは、玉村町飯倉の「養蚕神」碑である（災害碑番号 99）。その碑文に、「三季癸亥」、「降霜雪如」などと記されており、1863（文久 3）年の霜害を記したものであると思われる。霜害や雹害に関する碑文のあるものは、そのほとんどが明治中期に建立されている。それらはおもに 1887（明治 20）年雹害、1893（明治 26）年霜害に関連した碑である。この時期にはそれらの霜害や雹害以外にも、1890（明治 23）年霜害、1897（明治 30）年雹害などに関する記述が碑文に刻まれている碑が複数存在する。

1887 年雹害碑は、降雹被害が多発した榛名山南東麓に集中的に分布している。高崎市箕郷町柏木沢には、1887（明治 20）年 5 月 23 日の降雹で 30cm 以上雹が積もり、当地区の桑葉、麦穂、野菜に甚大な被害が生じ、蚕の飼料となる桑の葉がなくなったことで蚕の飼育が不可能となったため、村民は蚕児を地中に埋めたことなどを刻んだ「蠶影碑」が建立されている（災害碑番号 44）。

1893 年霜害碑は調査地域に広域的に分布するが、とくに安中市と伊勢崎市に多数分布する。伊勢崎市山王町の日枝神社境内には、1893（明治 26）年霜害に関する碑が 1 基（災害碑番号 103）と、1897（明治 30）年雹害に関する碑が 3 基（災害碑番号 105～107）存在する。1897（明治 30）年雹害に関する 3 つの碑は、当時の名和村大字山王道村の異なる組名が記されていることから、山王道村のそれぞれの組において 1897 年雹害に関わる碑を建立したものと思われる。その 3 基の碑の一つ、大字山王道村の東組が建立した碑（災害碑番号 106）には、明治 30 年 5 月 25 日午後 2 時からこぶし大の雹が降り、3 時間で 30cm ほど堆積し、桑園の葉や大麦、小麦はことごとく被害を受けて未曾有の惨状を呈したこと、蚕児を埋葬したこの社地に明治 31 年 4 月に建石したことなどが刻まれている（図 8）。

大正 5（1916）年霜害に関する記述のある碑が玉村町上之手（災害碑番号 98）と高崎市栗崎町（災害碑番号 65）に存在する。玉村町上之手の「上之手村霜害記念碑」には、大正 5 年 5 月 9 日に発生した霜害の西上州地域（群馬県西部）における被害は激甚であり、当地においても養蚕に甚大な被害が生じたことが刻まれている。霜害で蚕の飼料となる桑の葉が枯損して蚕の飼育が不可となり、やむなく蚕児を埋葬した当地にこの碑を建立し、この季節においても霜害を被ることがあることの戒めを後世に伝える旨が記されている（図 8）。本調査地域で雹霜害に関する記述のある碑で最も新しいものは、1935（昭和 10）年霜害を受けて 1937（昭和 12）年に前橋市下大島町に建立された「蚕霊塔」である（災害碑番号 39）。

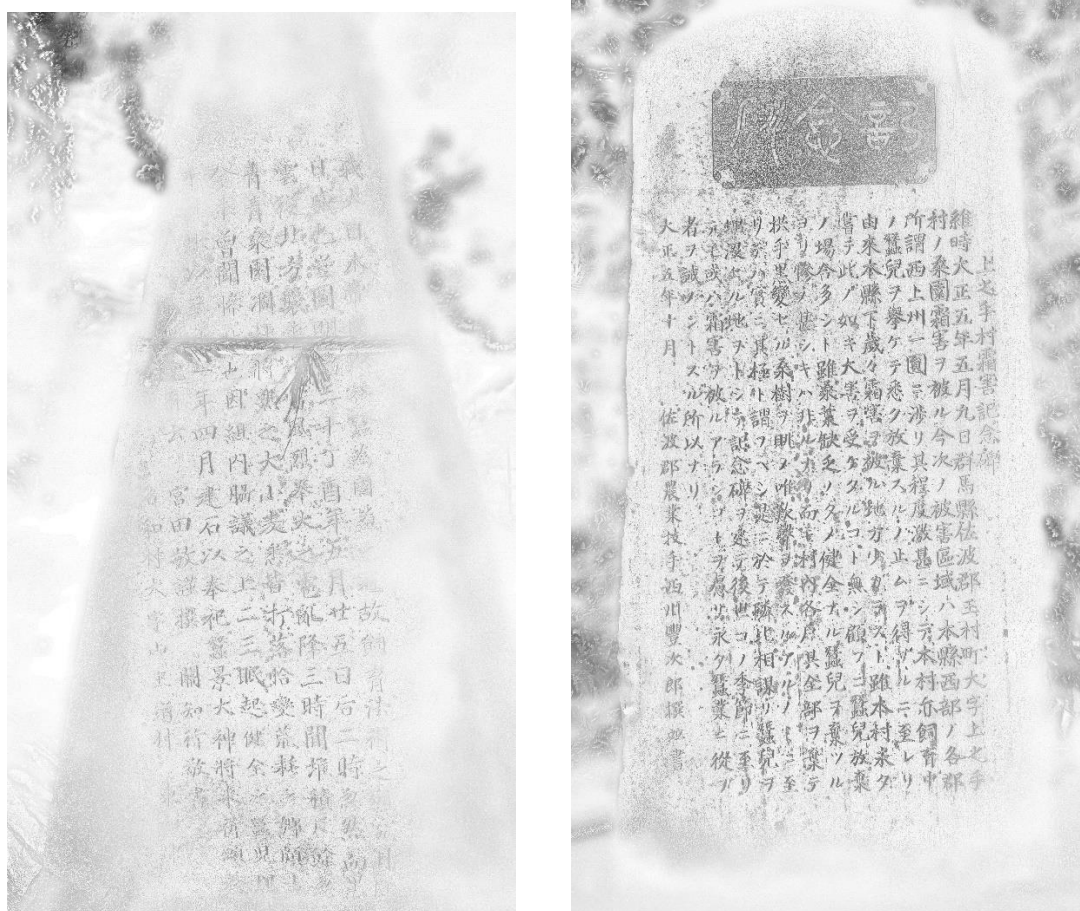


図8 群馬県伊勢崎市山王町日枝神社の1897（明治30）年雷害碑（左）と玉村町上之手の大正5（1916）年霜害碑（右）の「ひかり拓本」画像
（両碑ともに2025年2月青山撮影，画像取得）

VI. まとめと今後の展望

本研究では、関東平野北西部に位置する群馬県南部（一部県境付近の栃木県，埼玉県を含む）における災害碑の分布や碑銘，碑文，建立者，建立年などに関する情報を収集し，取りまとめた。本調査地域では，計149基の災害碑を確認した。災害種別ごとにみると，洪水と関連したものが63基，土砂災害に関わる碑が43基，風害に関するものが2基存在する。それらの多くは，1947（昭和22）年9月カスリーン台風水害，1935（昭和10）年9月台風10号水害，1910（明治43）年8月水害に関連したものである。本調査地域で特に明治期から昭和初期にかけて盛んにおこなわれていた養蚕業（蚕糸業）と強い関連性がある霜害碑が17基，雷害碑が8基存在する。1783年天明浅間山噴火による火山泥流，降灰やその後の凶作による米価高騰，飢饉などに関する記述の見られる災害碑は15基存在する。地震被害に関連した災害碑は，1931年西埼玉地震に関連したものが1基存在する。

本調査では，1947年9月カスリーン台風水害以降，多くの人的・経済的被害をもたらした大規模災害の発生はないため，一般的に災害が少ない安全な地域といったイメージが流布されている。しかし，長期的な時間スケールでみると，地域社会や地域経済に甚大な被害

とその影響をもたらした大規模災害がたびたび発生しており、犠牲者の供養や災害復旧の記念、甚大な被害発生に対する戒めを後世に伝承するためなど、多様な目的（意図）で建立された災害碑が多数存在していることが明らかとなった。それらには、地域における被災状況や災害からの復旧過程などが詳細に刻まれたものが多く存在する。自然災害は同じような地域で繰り返し発生する傾向があるため、過去の被災教訓を刻んだ災害碑は地域社会における今後の災害リスクを検討するうえで重要な資料となりうる。

本研究で得られた災害碑に関する情報を広範に公開・提供する観点から、「X(旧 Twitter)」のアカウント（アカウント URL：https://x.com/maoyama_geo）を取得し、SNSを活用した情報発信を開始した。今後、さらにホームページなど web による情報発信を推進することを予定しており、地域防災力の向上につなげていきたいと考えている。

謝辞

本研究は、国土地理協会第 23 回（2023 年度）学術研究助成金、JSPS 科研費（基盤研究 (C) 20K01140）を用いて行った。本研究を行うにあたり、現地調査の際に地域の歴史や災害碑に関する情報をご提供いただいた地域住民の方々、災害碑の情報提供や現地調査に同行いただいた群馬大学共同教育学部（教育学部）社会専攻卒業生のみなさんをはじめ、多くの方々からご協力いただいた。ここに厚く御礼申し上げます。

以下の引用・参考文献の一覧は、本稿中における引用文献だけではなく、本研究における調査の過程で参考とした文献も含まれる。

引用・参考文献

- 青山雅史 2020. 赤城山西麓・南麓における 1947 年カスリーン台風災害碑の分布と特徴. えりあぐんま 26, 23-45.
- 青山雅史 2020. 災害碑からみた過去の自然災害. 考古学ジャーナル 747, 30-33.
- 青山雅史 2022. 群馬県南部における雹霜害碑とその建立経緯の検討. 群馬大学共同教育学部紀要人文・社会科学編 71, 65-73.
- 青山雅史 2025. 災害碑に刻まれた群馬県南部における歴史災害. 群馬大学共同教育学部紀要人文・社会科学編 74, 69-86.
- 安中市市史刊行委員会編 2002. 『安中市史第六巻 近代現代資料編 1』 安中市.
- 伊勢崎市編 1985. 『伊勢崎の近世石造物』
- 伊勢崎市編 1987. 『伊勢崎市史 資料編 5 近現代Ⅱ』
- 板倉町史編さん委員会編 1980. 『板倉町史基礎資料第 84 号 利根川中流地域 板倉町周辺低湿地の治水と利水 別巻四一水場の生活と知恵一』
- 井上公夫 2009. 『噴火の土洪水砂災害—天明の浅間焼けと鎌原土石なだれ—』 古今書院.
- 井上公夫 2018. 『歴史的な大規模土砂災害地点を歩く』 丸源書店.
- 井上公夫 2019. 『歴史的な大規模土砂災害地点を歩く（そのⅡ）』 丸源書店.
- 上野村教育委員会編 2003. 『上野村誌（Ⅶ）上野村の地誌』 上野村.
- 卯花政孝 1991. 三陸沿岸の津波石碑—その 1・釜石地区—. 東北大学工学部 津波工学研

究報告 8: 171-230.

- 梅村唯斗・山本直哉 2024. 天明三年関連石造物調査から、天明三年を語り継ぐ会編『天明三年浅間山噴火を語り継ぐ』72-81.雄山閣.
- 大胡町誌編纂委員会編 1976.『大胡町誌』大胡町.
- 大胡町水難誌編集委員会編 1997.『大胡町水難誌』大胡町.
- 大友農夫寿・新井幸人 1983.『写真集 富士見村の文化財』富士見村郷土研究会.
- 尾島町誌編集委員会編 1978.『尾島町誌資料集第二篇 尾島町の石像遺物』
- 笠懸村誌編纂室編 1987.『笠懸村誌下巻』笠懸村.
- 金井竹徳・櫻井知得・石田寿信・永島政彦・伊藤克枝・鈴木英恵 2015. 養蚕と災害—雹霜害碑の調査—. 群馬歴史文化遺産発掘・活用・発信実行委員会.編『群馬の歴史文化遺産—近現代・養蚕文化—調査報告書』19-40. 群馬歴史文化遺産発掘・活用・発信実行委員会.
- 上郊村誌編纂委員会編 1976.『上郊村誌』
- 木瀬村誌編纂委員会編 1995.『木瀬村誌』
- 北原糸子 2001. 東北三県の津波碑. 津波工学研究報告 18: 85-92.
- 桐生市史別巻編集委員会編 1971.『桐生市史別巻』桐生市役所.
- 倉渕村誌編集委員会編 1975.『倉渕村誌』倉渕村役場.
- 群馬県 1937.『昭和十年群馬県風水害誌』群馬県.
- 群馬県 1947.『昭和二十二年九月 大水害の実相』群馬県.
- 群馬県 1971.『群馬県百年史上巻』群馬県.
- 群馬県議会事務局編 1954.『群馬県議会史 第三巻』群馬県議会.
- 群馬県勢多郡敷島村村誌編纂委員会編 1959.『群馬県勢多郡敷島村誌』
- 群馬県防災会議 2024. 群馬県地域防災計画. <https://www.pref.gunma.jp/page/8129.html> (最終閲覧日: 2024 年 8 月 10 日)
- ぐんまの土地改良記念碑編集委員会編 2008.『ぐんまの土地改良碑』群馬県土地改良技術者会.
- 群馬町誌編纂委員会編 2000.『群馬町誌資料編 3 近代現代』群馬町.
- 群馬町誌編纂委員会編 2002.『群馬町誌通史編下 近代現代』群馬町.
- 小池末廣 2002.『渋川市・北群馬郡・地方の石文』
- 国土地理院 2019. 地図で確認 先人が伝える災害の教訓. <https://www.gsi.go.jp/bousaichiri/bousaichiri190315.html> (最終閲覧日: 2024 年 8 月 10 日)
- 国府村誌編纂委員会 1968.『国府村誌』
- 阪本英一 2008.『養蠶の神々—蚕神信仰の民俗—』群馬県文化事業振興会.
- 里見村誌編纂委員会編 1960.『里見村誌』
- 砂防広報センター編 1998.『碑文が語る土砂災害との闘いの歴史』
- 首藤伸夫 2001. 昭和三陸津波記念碑 —建立の経緯と防災上の意義—. 津波工学研究報告 18: 73-84.
- 榛東村誌編さん室編 1988.『榛東村誌』榛東村.
- 新町町誌編纂委員会編 1989.『新町町誌通史編』新町教育委員会.
- 関 俊明 2018.『【普及版】災害を語り継ぐ—複合的視点からみた天明三年浅間災害の記憶—』雄山閣.

勢多郡東村誌編纂室編 1998.『勢多郡東村誌 通史編』 勢多郡東村.
 勢多郡誌編纂委員会編 1958.『勢多郡誌』
 総社町誌編纂委員会編 1956.『總社町誌』 群馬県前橋市総社出張所.
 高崎市史編さん委員会編 2004.『高崎市史通史編 4 近代現代』 高崎市.
 高崎市史編さん委員会編 1995.『高崎市史資料編 9』 高崎市.
 高崎市地域まちづくり推進事業鼻高まちづくり実行委員会 2001.『鼻高町の歴史と民俗』
 武村雅之 2012.『関東大震災を歩く―現代に生きる災害の記憶』 吉川弘文館.
 玉村町誌編纂委員会編 1995.『玉村町誌通史編下巻』 玉村町.
 中央防災会議災害教訓の継承に関する専門調査会 2006. 1783 天明浅間山噴火 報告書.
https://www.bousai.go.jp/kyoiku/kyokun/kyoukunnokeishou/rep/1783_tenmei_asamayama_funka/index.html (最終閲覧日: 2024 年 8 月 10 日)
 中央防災会議災害教訓の継承に関する専門調査会 2010. 1947 カスリーン台風報告書.
http://www.bousai.go.jp/kyoiku/kyokun/kyoukunnokeishou/rep/1947_kathleen_typhoon/index.html (最終閲覧日: 2024 年 8 月 10 日)
 千代田村誌編さん委員会編 1975.『千代田村誌』 千代田村役場.
 堤ヶ岡村誌編纂委員会編 1955.『堤ヶ岡村誌』 群馬県群馬郡堤ヶ岡村役場.
 富岡市市史編さん委員会編 1988.『富岡市史近代・現代資料編 (下)』 富岡市.
 富岡製糸場世界遺産伝道師協会 (蚕神総合調査プロジェクトチーム) 編 2018. 群馬の蚕神: 群馬県蚕神総合調査報告書. 富岡製糸場世界遺産伝道師協会.
 中島のあゆみ編纂委員編 1991.『中島のあゆみ』
 日本気象協会前橋支部編 1982.『群馬県気象災害史』
 萩原幸男・村田一郎・田島広一・長沢 工・井筒屋貞勝・大久保修平 1986. 活断層の重力調査(1): 1931 年西埼玉地震の震源断層の検出. 地震研究所彙報 61, 563-586.
 羽鳥徳太郎 1978a. 高知・徳島における慶長・宝永・安政・南海道地震の記念碑. 地震研究所彙報 53, 423-445.
 羽鳥徳太郎 1978b. 三重県沿岸における宝永・安政東海地震の津波調査. 地震研究所彙報 53, 1191-1225.
 原東水害記録編集委員会編 1978.『キャスリン台風 大水害のきず跡』
 藤岡市史編さん委員会編 1994.『藤岡市史資料編: 近代・現代』 藤岡市.
 富士見村誌編纂委員会編 1954.『富士見村誌』 富士見村.
 富士見村誌編纂委員会編 1979.『富士見村誌 続編』 富士見村.
 前橋市戦災復興誌編集委員会編 1964.『戦災と復興』 前橋市.
 松井田町誌編さん委員会編 1985.『松井田町誌』
 箕郷町誌編纂委員会編 1975.『箕郷町誌』 箕郷町教育委員会.
 宮健人 2021. 烏川下流域における水害リスクの伝承と認知に関する研究―藤岡市小野地区を中心に―. えりあぐんま 27, 21-45.
 室田町誌編集委員会編 1966.『室田町誌』 室田町誌編纂委員会.
 明和村誌編さん室編 1985.『明和村誌』
 明和村役場村誌編さん室編 1982.『明和村の記念碑』
 茂木一次 1953.『赤城南面 昭和水難誌』 水難者慰霊会.

山田武麿・早川光三郎監修 1983. 『群馬の古碑』 上毛新聞社.
吉岡村誌編纂室編 1980. 『吉岡村誌』 吉岡村教育委員会.